

〃	一二年度	八七、二三二・六一	一三五、三〇八・四三	一四八、〇一〇・四〇	<small>收入は豫算額、基金及事業資金並に資産總額は年度半に付前年度繰越額を記せり</small>
〃	一三年度	九六、四八一・五〇	一四三、四四七・〇二	一五四、六三五・六五	
〃	一四年度	一三九、三二二・〇〇	一四三、四四七・〇二	一五四、六三五・六五	
〃	〃				

### (四) 本會の事業の概要

本會の會員は日本内地はもとより滿洲、朝鮮、臺灣、樺太並に遠く外國に迄も互つて居り、是等の會員に對し充分に本會の目的を徹底せしむることは容易の業にあらざるも、創立以來役員諸氏は全會員と協力一致して此目的の達成に向つて其最善を盡し來たつたのである。而して此目的のために本會は機關誌の發行及講演會を開催し會員各位の獨創的研究、調査、其他を發表し、又毎年各地へ見學視察旅行を催して、一般會員の斯學に關する知識の啓發に資することにして來たのである。尙此外本會に於ては各種の調査委員會を設けて各種の調査研究をなし、又廣く諮問に應じ以て學會としての職責を盡して來たのである。以下其内容を少しく記載することとする。

#### 1 機關雜誌の發行

本會の機關雜誌は土木學會誌と稱し、創立以來昭和三年迄毎年六回宛發行し來たのである。會誌の

體裁は從來堅組なりしを、大正十三年第十卷第一號より之を横組と更め字數を増加し、内容を豊富に  
なせるも、斯くの如く隔月發行にては到底斯界の發展に副ふことを得ざるにより、昭和五年一月第十  
五卷第一號より之を年十二回即ち毎月發行とすることに更め、爾後今日に及んで居るのである。

## 2 各種の調査委員會

本會に於ける事業の一として、既往に設置されたる調査委員會は大小種々あるも、今主なるものを  
掲ぐれば、大正六年五月帝國鐵道協會と協同して東京市内外交通調査委員會を組織し、東京市内外に  
於ける交通に關する調査をなしたのである。當時會を重ねる事三十餘回に及び、大正八年六月其調査  
を完了し、其調査報告を發表した。該報告書は土木學會誌第五卷第六號附録として、一般會員に配布  
した、次で大正九年二月大阪市長よりの依頼により、大阪市内外高速交通機關に關する調査を行ひ、  
帝國鐵道協會と協同のもとに、大阪市内外高速鐵道調査會を組織し調査を進め、大正十二年三月、其  
調査を完了の上報告せり。該報告書は第十一卷第五號附録として一般會員に發表したのである。又大  
正十年四月本會は帝國鐵道協會と共同して、東京及横濱附近の交通調査を爲したのであるが、曩に大  
正八年に東京市内交通に關する調査を遂げたるが、該調査は専ら旅客交通を主としたるもので、貨物  
運輸に就ては其の調査研究を他日に譲りたるを以て、東京及横濱附近交通調査會なるものを設け、専

ら貨物運輸に關する企畫を樹立せんことを期し、同年七月第一回委員會を開き、之が調査の範圍並に方針等を明にし、爾來三年有餘の歲月を費し二十數回の會議をなし、全般の調査に當り各種の書類を徴して審議を盡し、或は實地に就きて視察を遂げ反覆討議の結果大體の成案を得たのであつたが、偶々大正十二年の大震火災に遭遇して關係書類を烏有に歸せしめたが、貨物停車場と連絡する道路及運河に關する調査は再調査易ならざるのみならず、震災後當時の事情は寧ろ之を復興局に讓るを妥當としたるにより、貨物停車場の配置、鐵道線路及停車場の位置選定、東京及横濱に於ける港灣施設の大要を土木學會誌第十二卷第二號附録として發表したのである。

大正十二年九月關東地方に於ける大震災に鑑み本會は、東京及横濱の復興計畫に關する調査委員會を設け、土木學會帝都復興調査委員會の名稱を附し、兩市及び其附近に於ける鐵道高速度交通機關、道路、公園及廣場、運河及港灣其他に就き調査並に審議を遂げ意見書を作成し、時の内閣總理大臣及内務、鐵道、遞信の各大臣並に帝都復興院總裁に建議し、尙東京府知事、神奈川縣知事及東京、横濱兩市長に之を提出したのである。尙上記以外に帝都復興計畫に關し、各専門の方面より斯道研究者會合し充分なる意見の交換を行ひ、以て適當の成案を作成し關係當局に建議するは時宜に即したる措置なりと認めためたので、東京市政調査會より、本會に對し其主催者として賛同方の照會に接したるを以

て、同年十二月八日土木學會、東京市政調査會、工政會、都市研究會及建築學會の聯合主催の下に、各學會協會等より三名以内の代表者を選出して帝都復興聯合協議會を組織し、政府の公表せる帝都復興計畫案及同事業豫算案等に就き慎重審議の結果意見書を作成し、之が實行方を關係當局に建議したのである。尙大地震の土木工事に及ぼせる災害の最も正確なる記録を作製し、之を後世に傳へ以て將來土木建築工事上の參考指針たらしむが爲めに、大正十三年一月特に本會に於て震害調査會を設け、調査に當りては調査事項を第一部河川、灌漑、砂防、運河、港灣、第二部橋梁及び建物、第三部水道、下水道及び瓦斯工事、第四部鐵道及び軌道、第五部發電關係土木工事、第六部道路の六部門に分ち、各部門毎に當該方面の權威者よりなる分科委員會を組織し資料の蒐集、選擇、被害の攻究に當つたのである、上記の委員は委員長に故廣井勇博士を推し委員は七十名であつた。尙本調査會の調査完了を待つて逐次該報告として第一卷は大正十五年八月に、第二卷は昭和二年一月に、第三卷は同年十二月に、都合三冊より成る、浩翰なる報告書を印刷公表したのである。

東京高速鐵道調査會（大正十三年一月設置）

大正十三年一月高速鐵道調査委員會を設置し、委員長に古川阪次郎氏を、他に委員二十四名を依頼し東京市内外に於ける高速鐵道に關する調査研究をなし、昭和三年十二月其調査を完了したのであ

る。

コンクリート調査會（昭和三年九月設立）

昭和三年九月、混凝土調査會を設け、委員長大河戸宗治氏他委員六十二名を依囑し、一般混凝土に關する調査研究を行ひつゝあるものであるが、右は軌近混凝土工學の發達に伴ひ、土木事業に於ては大いに之が利用に依り工事實施上一新紀元を劃するに到り、又從來之が使用に際しては施工上各所任意に示方其他を定め此間何等の統一なく、斯る状態では斯業の發展上頗る遺憾の次第であつたので、統一的ものの調査選定を行つたのである。本調査會設立以來各委員の熱心なる努力に依り三箇年に亙り此間數十回の委員會を開き慎重審議を重ね、昭和六年九月鐵筋混凝土標準示方書を同年十月同示方書の解説を發表し次で昭和十年六月新にコンクリート調査委員會を設け委員長に大河戸宗治氏及藤井眞透氏他委員十名を依囑し、研究の結果同示方書の一部改訂を發表し更に昭和十四年六月委員長に吉田徳次郎氏を依囑して本示方書の改訂に就き鋭意調査研究を行ひ改訂案を第二十五卷第九號を以て發表し、引續き示方書解説並に無筋コンクリート標準示方書に就き調査研究中である。

用語調査會（昭和三年九月設立）

昭和三年九月本會に用語調査會を設置し、委員長中山秀三郎氏、幹事長に中川吉造氏他委員百三十

九名を依囑し、土木工學に關する主要用語を調査し、特に之が定義及解釋を主とする調査を行ひ昭和三年十月以來八箇年其間四十二回に互り委員會を開き慎重審議を重ね昭和十一年十一月、日、英、獨佛語に依る土木工學用語集を刊行し、次で昭和十一年九月用語調査常置委員會を新に設置し委員長に中川吉造氏他委員十二名を依囑し、用語増補及英和工學辭典の改訂に就き調査中である。

世界動力會議大堰堤國際委員會日本國內委員會（昭和六年三月設立）

昭和六年三月本會は日本動力協會及電氣協會の三會聯合のもとに、國際會議大堰堤國際委員會へ加盟し、日本國內委員會を組織し各會より委員各六名宛を選出し、尙本會より更に専門委員三十名を依囑して現在繼續中のものである。

土木建築士法案調査會（昭和六年九月設置）

昭和六年九月本會に土木建築士法案調査委員會を設け、委員長を那波光雄氏とし、以下委員四十名を依囑した。右は時世の進運に伴ひ、今後益々斯界の統一上にも亦發展上にも最緊要と認め、研究をなすことになしたるものにして、爾來引續き調査中であつたが昭和十一年五月土木士法案として研究することに改め委員長に眞島健三郎氏、他委員十五名を新に依囑し、昭和十三年四月構造士法案として其の研究を完了したのであるが之が取扱ひに就ては尙研究中のものである。

維新以前日本土木史編纂委員會（昭和七年九月設立）

昭和七年九月本會に維新以前日本土木史編纂委員會を設置した。其目的とする所は、古來本邦に於て相當著名なる土木工事の施工せられたるもの尠からざるにも拘はらず、現在維新以前に於けるものは、其資料多くは散逸して、先人の偉大なる遺業も詳細に之を知ることが困難の状態なるのみならず、今後年を経るに従ひ、益々甚しくなるは明かなるを以て、極力之が資料を蒐集の上編纂し以て先人の遺業を明かにし、温故知新に備ふるは學會當然の責務と認め、本委員會を設置したるものにして、委員長に田邊朝郎氏、副委員長に眞田秀吉氏を擧げ、他に常務委員二十三名、地方委員六十二名を依囑し、以來三箇年餘資料の蒐集並に調査及編纂を爲し、昭和十一年六月約千八百頁に亙る明治以前日本土木史を刊行するに至りたるものである。

土木工學論文抄錄編纂委員會（昭和九年四月設置）

昭和九年四月本會に土木工學論文抄錄編纂委員會を設け、委員長を中川吉造氏とし、以下委員五十八名を依囑し、大正及昭和年間に於ける我が國の土木工學に關する論文抄錄を本會創立二十周年記念事業の一として編纂すべく銳意之が調査を行ひ、昭和九年十月調査を完了し土木工學論文抄錄の刊行を見るに至りたるものである。

昭和十三年六月新に土木工學論文抄録編纂委員會を設け、委員長を久保田敬一氏とし、以下委員三十二名を依囑し、前回收録したるもの以降昭和十三年六月末迄に發表せられた土木工學に關する論文抄録を本會創立二十五周年記念事業の一として編纂することとし其の調査を行ひ、昭和十四年十月之が調査を完了し土木工學論文抄録第二輯を刊行したのである。

關西地方風水害調査委員會（昭和九年十月設置）

昭和九年十月本會に本委員會を設け、委員長を中川吉造氏副委員長を青山士氏、平井喜久松氏とし、以下委員六十八名を依囑して昭和九年九月二十一、二十二兩日に於ける關西地方に起りたる風水害の各種土木工事に及ぼせる災害の最も正確なる記録を作製し、之を後世に傳へ以て將來土木建築工事上の參考資料たらしめんが爲本委員會を設けて調査を爲し、昭和十一年十月關西地方風水害調査報告書を刊行公表したものである。

臺灣地方震災調査委員會（昭和十年五月設置）

昭和十年五月本會に本委員會を設け、委員長を草間偉氏、特別委員長を堀田鼎氏とし、以下委員十五名を依囑して昭和十年四月二十一日臺灣新竹、臺中地方に起りたる地震に依る各種土木工事に及ぼしたる災害を最も正確に記録し將來土木建築工事上の參考指針たらしめんが爲本委員會を設置して調



査を爲し、昭和十一年八月臺灣中部地方震害調査報告として土木學會誌第二十二卷第八號にて公表したのである。

土木技術者相互規約調査委員會（昭和十一年五月設置）

我國に於て未だ技術者相互の規約例へば「エンヂニヤリングエシックス」の如きもの無さを遺憾とし之が作成に關し調査研究すべく昭和十一年五月本會に本委員會を設け委員長を青山士氏とし、以下委員十二名を依囑し、諸外國に於ける技術者相互規約、技術者の業務法典等を一應參照し(1)土木技術者の品位の向上(2)土木技術者の矜持と權威の保持、之等二項目の意を體し併せて之を我國情に適合し且又技術家への指針となるべきものの作成に努め、昭和十二年十二月「土木技術家の信條」と「土木技術家の實踐要項」の成文を得て之を公表するに至りたるものである。

請負工事標準契約書調査委員會（昭和十一年五月設置）

昭和十一年五月本會に本委員會を設け、委員長を池田嘉六氏とし、以下委員十四名を依囑して請負工事に關する標準契約書即ち相互契約として適當であり且つ監督技師の權能又は賠償等の條項を最も公正なる立場に於て調査研究し昭和十三年九月之が原案を發表して廣く關係者の意見をも求め、昭和十四年六月請負工事契約書を制定發表するに至りたるものである。

行政機構改正調査委員會（昭和十一年五月設置）

昭和十一年五月本會に本委員會を設け、委員長を八田嘉明氏とし、以下委員二十四名を依囑して現在の行政機構に關して改正すべき諸點を研究し昭和十三年五月大體の成案を得たるも之が取扱ひに就て攻究中のものである。

東亞調査委員會、東亞連絡委員會（昭和十一年五月設置）

本會東亞部事業の遂行機關として昭和十一年五月本委員會を設け、東亞調査委員會委員長を中川吉造氏とし、以下委員三十四名を、東亞連絡委員會委員長を久保田敬一氏とし、以下委員三十名を依囑して東亞各國の技術連絡、留學生の誘致指導、資源開發、文化建設に關する調査研究等の事業を時局對策委員會と關聯して進行中のものである。

鋼橋示方書調査委員會（昭和十一年五月設置）

時勢の進運と橋梁技術の進歩發達に伴ひ鋼橋標準設計示方書も其の改正の必要を痛感せらるゝに至れり、本會は夙に此點に着目し、昭和十一年五月本會に本委員會を設け、委員長を田中豐氏とし、以下委員十四名を依囑して銳意之が調査研究の結果成案を得て、土木學會誌第二十五卷第八號を以て鋼鐵道橋標準設計示方書案を發表するに至りたるものである。

杭ノ支持力公式調査委員會（昭和十一年九月設置）

昭和十一年九月本會に本委員會を設け、委員長を谷口三郎氏とし、以下委員二十六名を依囑し本邦土木工事の重要な杭打ち工事に對し支持力を算定すべき公式なきを遺憾とし、之が公式を制定すべく全國各地に於ける各種工事に對する杭打ちの實績を調査し、又諸外國の文獻等をも參考として研究中であつたが昭和十四年八月委員長に青山士氏を新に依囑し引續き調査研究中のものである。

文化映畫委員會（昭和十一年九月設置）

昭和十一年九月本會に本委員會を設け、委員長を金森誠之氏及青木楠男氏とし、以下委員十名を依囑し、土木技術の紹介普及並に土木技術が文化の進展に重要な點を一般に認識せしめ、進んでは本邦土木技術を映畫に依り世界に紹介せんとする目的の下に之が研究を進めて居るものである。

防空施設研究委員會（昭和十二年二月設置）

昭和十二年二月本會に本委員會を設け、委員長を眞田秀吉氏とし、以下委員二十八名を依囑し、東部防衛司令部に於て組織せられた防空施設研究會と聯携し、各種土木施設、都市施行等の防空に關する研究を爲し、昭和十三年八月第一部一般避難計畫、第二部防火、消防、給水施設、第三部構造物の偽裝、遮蔽、補強及防護等に就き調査研究の結果を土木學會誌第二十四卷第八號を以て公表するに至

りたるものである。

オリンピック大會土木施設調査委員會（昭和十二年二月設置）

昭和十二年二月本會に本委員會を設け、委員長を岡野昇氏とし、以下委員十四名を依囑し、第十二回オリンピック東京大會に於ける土木施設に關し調査研究を爲し、同大會關係諸施設の最短期間を提示して會場敷地決定の促進並に同大會構築委員會に土木技術家を參加せしむべき事及マラソンコースとして新京濱國道を採擇すべき事等を建議し、其の他事項に關し引續き研究中であつたが支那事變に依る同大會の中止に伴ひ本委員會も解散することにしたのである。

地下構造物に於ける鋼材節約調査委員會（昭和十二年九月設置）

昭和十二年九月本會に本委員會を設け、委員長を新井榮吉氏及堀越清六氏とし、以下委員十九名を依囑し、地下鐵道工事に於ける鋼材節約の一般方策を調査研究中のものである。

時局對策委員會（昭和十三年三月設置）

時局に對應して國內外の土木に關する事業、行政、教育其の他各般の國策を研究する機關として昭和十三年三月本會に本委員會を設け、委員長を中川吉造氏とし、以下委員二十一名を依囑し、大陸建設に關しては中北支那に於ける土木事業を調査研究するため視察員として斯界の權威たる井上秀二、

青山士、橋本敬之、大河戸宗治、新井榮吉の諸氏を派遣し、又對支中央機關内に技術的指導機關設置方建議、技術者總動員に關する調査、興亞建設の基礎たるべき土木技術教育及諸計畫の樹立等に關し調査研究中のものである。

#### 外人功績調査委員會

(昭和十三年六月設置)

昭和十三年六月本會に本委員會を設け、委員長を那波光雄氏、副委員長を眞田秀吉氏とし、以下委員十六名を依囑し、明治年間我國に招聘せられた土木工學に關係ある外人の遺功を調査編纂し以て其の功績を後世に傳ふるは學會本來の目的に副ふのみならず他日文明史編纂上貴重なる資料たるを認め本委員會設立以來往時の關係者に依る座談會の開催及各方面に互り資料の蒐集乃至調査中のものである。

#### 關東及關西地方水害調査委員會

(昭和十三年八月設置)

昭和十三年八月本會に本委員會を設け、委員長を眞田秀吉氏、副委員長を鈴木雅次、阿曾沼均兩氏とし、以下委員五十七名を依囑し、昭和十三年六、七月中關東、東海、關西地方に起りたる風水害に依る被害の狀況及原因を調査して正確なる記録を作製し以て將來土木建築工事上の參考資料となすべく爾來資料の蒐集乃至調査中のものである。

以上の外昭和八年一月土木學會振興委員會を設け、委員長を大河戸宗治氏とし、以下委員十四名を依囑して學會振興に關する十九項目に互る要綱を決定し、昭和十年三月更に土木學會振興委員會を設け、第一部委員長を中山秀三郎氏とし、以下委員十八名、第二部委員長を平山復二郎氏及古川淳三氏とし、以下委員二十三名、第三部委員長野坂孝忠氏及太田尾廣治氏とし、以下委員二十二名を依囑して昭和十二年三月土木學會企畫委員會を設け、委員長を米元晋一氏とし、以下委員二十九名を依囑して振興策の實行方法に就き検討し、昭和十一年九月土木學會財政調査委員會を設け、委員長を前川貫一氏とし、以下委員二十二名を依囑して有效適切なる財政計畫を樹て本會の活動を一層旺盛ならしむるに努めたのである。

### 3 優秀論文に對する土木學會土木賞牌の授與

本會規則第三十五條に基き、毎年土木學會誌に登載したる論說報告中優秀と認めたる論文に對し、土木賞牌を授與したる論文名及執筆者其他は次の如くである。

年 度	題 目	掲載會誌	氏 名
大正九年	載荷せる構造物の震動並に其耐震性に就て	第六卷 第四號	工學博士 物 部 長 穂

大正十年	混泥土の彈性係數に關する實驗	第七卷 第六號	工學博士 日比忠彦
大正十一年	神戸稅關海陸運輸聯絡設備概要	第八卷 第四號	工學博士 高橋逸夫
大正十二年	繫船岸壁の構造及之が築設に關する構造上の私見	第九卷 第四號	工學博士 森垣龜一郎
大正十三年	矩形床版の撓度並に應力に就て	第十卷 第六號	工學博士 高西敬義
大正十四年	拱橋の設計に就て	第十一卷 第五號	工學博士 井口鹿象
大正十五年	支線式無線電信柱	第十二卷 第四號	工學博士 大河戶宗治
昭和二年	Verdrehungsversuche mit Umlenkwerten und Bewehrten Betonkörpern	第十三卷 第一號	工學博士 草間偉
昭和三年	Thermal Flexure of a Triplate Heated on one Surface. Extortional Stresses taken into Account	第十四卷 第三號	工學士 宮本武之輔
昭和四年	On Strength of Columns with Variable Cross Sections	第十五卷 第三號	工學士 山口昇
昭和五年	C. Rungel's Theorem に依る積分曲線を用ひて種々なる Surge Tank の研究	第十六卷 第七號	工學士 田中豐
昭和六年	單鉸拱模型試驗 單鉸拱振動に關する考究	第十七卷 第十二號	工學博士 新井榮吉
昭和七年	沈降速度の理論及實驗	第十八卷 第十號	工學博士 三浦七郎
			工學博士 鶴見一之

昭和八年	“Theorie der Roste und ihre Anwendungen”	第十七卷 第五、十號 第十八卷 第六、七號 第十九卷 第七、十號	工學博士 工學博士 工學博士	福田武雄
昭和九年	軌條の挫屈に就て	第二十卷 第十號	工學博士	堀越一三
昭和十年	不靜定構造の解法に應用したる撓角分配法	第二十一卷 第一號	工學博士	鷹部屋福平
昭和十年	鑄鐵管に於ける流量に就て	第二十一卷 第二號	工學博士	池田篤三郎
昭和十一年	連續拱橋の解法	第二十二卷 第十一號	工學博士	三瀬幸三郎
昭和十二年	清水港岸壁の復舊並に補強工事に就て	第二十三卷 第九號	工學士	鮫島
昭和十三年	任意の數の集中荷重を擔ふ可撓性索條に就て	第二十四卷 第七號	工學博士	黒田靜夫
昭和十三年	瀝過阻止率の計算	第二十四卷 第八、九號	工學博士	吉町太郎 岩崎富久

4 講演及映畫會の開催

本會定例講演會は毎年少くも三回以上を開催し、現在迄に映畫會共八十四回に及んで居るのである。

5 見學視察旅行



見學視察旅行は本會創立以來毎年春期に於て一回催すを例とし來たれるも、會員多數の要望により事情の許す限り昭和八年以來數回開催することに更めたのである。次に既往に於ける見學視察旅行先を掲ぐれば左の通りである。

回数	年 月 日	視 察 箇 所
第一回	大正五年五月七日	足尾銅山
第二回	大正六年五月六日	日立鑛山
第三回	大正七年五月五日	房總線勝山地方
第四回	大正八年五月十二日	横須賀軍港
第五回	大正九年五月十六日	山梨縣下谷村町附近水力電氣工事 (桂川水力、東京電力)
第六回	大正十年五月十五日	鐵道省上越南線建設工事
第七回	大正十一年五月十三日	熱海線丹那隧道工事
第八回	大正十二年五月六日	利根川(下流)改修工事
第九回	大正十三年四月二十七日	東京市村山貯水池工事及境淨水場

第十回	大正十四年五月十六日
第十一回	大正十五年五月十五日
第十二回	昭和二年四月二十八日
第十三回	昭和三年五月十二日
第十四回	昭和四年四月二十八日
第十五回	昭和五年五月十一日
第十六回	昭和六年三月二十二日
第十七回	昭和七年四月二十九日
第十八回	昭和八年五月十七日
第十九回	昭和八年十月二十九日
第二十回	昭和九年六月十一日
第二十一回	昭和九年十一月十八日
第二十二回	昭和十年五月五日
第二十三回	昭和十年十月二十七日
第二十四回	昭和十一年五月十八日
第二十五回	昭和十一年十月十一日

静岡縣清水港

利根川及江戸川改修工事

名古屋地方大同電力會社大井ダム大日本ビル會社工場及鐵道省木曾川橋梁工事

北陸地方庄川水電及日本電力發電工事

關西方面土木事業

群馬縣下關東水力電氣會社佐久發電所東京電燈株式會社澁川發電所及鐵道省清水隧道工事

伊豆地方及清水港震害狀況

大阪驛改良工事大阪地下鐵道工事  
龜ノ瀬隧道附近地之被害狀況

神奈川静岡兩縣下道路工事及丹那隧道工事

大島

鐵道省信濃川水力發電工事並に新潟港

富士五湖及箱根

香取、鹿島神社、霞ヶ浦航空隊、橫利根開門、水郷大橋工事  
第一國道、五大橋、名古屋港、名古屋下水處分場、名古屋城、名古屋驛  
高架線工事

箱根自動車專用道路、宇佐美隧道工事、熱海海岸埋立工事

東京電燈小野川發電所工事、裏磐梯山五色沼、檢原湖、東山溫泉

第二十六回	昭和十二年五月八日	關東水力佐久發電所、群馬水電原町發電所、東信電氣田代貯水池、碓氷國道、九十九里川災害復舊工事、鬼押出の奇岩、長谷川養狐所
第二十七回	昭和十三年五月十五日	東北振興電力發電所工事、阿武隈川及第四國道改修工事、日東紡績工場、信夫文字指
第二十八回	昭和十四年五月二十一日	熱田神宮參拜、名古屋港、中部共同火力發電所、愛岐水力今渡發電所、日本ライン下り
第一回見學會	昭和九年三月二十四日	川崎市所在、明治製菓株式會社、東京製鋼株式會社、東京電氣株式會社
第二回見學會	昭和九年五月十二日	山口、村山貯水池
第三回見學會	昭和九年七月七日	橫濱港及東京灣埋地
第四回見學會	昭和九年九月二十九日	內閣印刷局瀧野川工場、理化學研究所
第五回見學會	昭和十年四月六日	大日本麥酒川口工場、大宮公園、第九號國道
創立二十周年記念見學會	昭和九年十月二十七日	東京地方專賣局業平工場、新帝國議事堂、東京市中央卸賣市場、東京港、第三臺場、東京市芝浦下水處分場
創立二十五周年記念見學會	昭和十四年十月二十九日	鐵道省大宮工場、大宮公園、東京港、キリン麥酒橫濱工場

## 6 各種の大會

### 第一回工學大會

昭和二年には工學會の主催により同年十一月三日より同七日に亙り工學會大會を東京帝國大學構内安田講堂に於て開催し總會當日には本會代表講演として會長工學博士市瀬恭次郎氏により「明治維新以降我邦に於ける土木施設の一斑に就て」と題し講演あり次で同會期中土木部會として二日に亙り、

東京商工獎勵館に於て、講演會を催し本會會員中より井上範氏、山口昇氏、廣中一之氏、小野基樹氏、牧野雅樂之丞氏、大河戸宗治氏、橋本敬之氏、島重治氏、安藝杏一氏、新井榮吉氏、瀧山與氏、吉田徳次郎氏の十二名により講演あり、尙東京市並に其附近に於ける、各種の工場其他の見學視察を行つたのである。

#### 萬國工業會議

昭和四年には工學會の主催を以て同年十月二十九日より同十一月七日に互り、東京市に於て萬國工業會議を開催した、本會も之が開催には多大の協力をなし、會議の議長には、前會長古市公威氏就任し、副會長には、各學會長之に當り、本會より當時の會長たりし、田邊朔郎氏就任せられた、又同會議の部會として土木部會、鐵道部會開會の際には、本會員中より數名座長となり、又會員中より同會議へ論文の提出ありたるは、九十九名に昇つたのである、同會期中十一月四日東京市芝區淺野紫雲閣に於て、本會及港灣協會並に道路改良會の三會聯合にて同會議海外會員中の土木關係者九十餘名を招待し盛大なる午餐會を催したのである。

#### 應用力學大會

昭和六年十月三十一日より十一月二日の三日に互り、本會及建築、機械、造船、火兵の五學會聯合

主催で應用力學大會を開催し本會會員福田武雄氏、吉田彌七氏、青木楠男氏、井口鹿象氏、稻田隆氏、木村二郎氏、久野重一郎氏、田中豐氏、鷹部屋福平氏、堀越一三氏、安藏善之輔氏、山口昇氏、物部長穗氏の十三名により論文の發表があつた。

### 第二回工學大會

昭和七年四月五日より同九日の五日間に互り日本工學會主催にて本會他十一學會聯合にて第二回工學會大會を東京帝國大學大講堂に於て開催した總會當日には本會代表講演として副會長工學博士大河戸宗治氏の「鐵筋コンクリートの將來に就て」と題する講演あり次で同月六日及七日の二日間東京帝國大學工學部第一號室に於て土木部會を開き會員小野諒兄氏、高橋甚也氏、松尾春雄氏、平井喜久松氏、西川榮三氏、福田武雄氏、吉田徳次郎氏、井上隆根氏、菊地英彦氏、山崎匡輔氏、田中吉政氏、武居高四郎氏の十二名により講演を行つたのである。

次で同月八、九日は東京附近に於ける著名なる工場及工事其他の見學をなし、尙參加會員により新宿御苑の拜觀及兩日各午後六時より朝日講堂に於て通俗講演會を開催し、本會より會員滿鐵技術部次長根橋禎二氏により「最近の滿蒙に於ける鐵道に就て」の演題の下に講演を行つたのである。

### 第三回工學大會

昭和十一年四月四日より五日間に亙り日本工學會主催の下に土木學會外十四學會聯合にて第三回工學會大會を東京帝國大學講堂に於て開催した。總會當日には本會代表講演として會長井上秀二氏の「輓近に於ける本邦土木事業の情勢」と題する講演あり、次で五、六の二日間東京帝國大學工學部第一、二、三、五號室に於て土木部會を開き、各部門に依る一七七の論文發表あり參會者六〇〇餘名であつた。又七、八の二日間は新宿御苑の拜觀及東京附近に於ける著名工場の見學を爲し、尙六日及七日午後六時より仁壽講堂に於て通俗講演會を開催し、本會より會員鐵道省建設局工事課長平山復二郎氏により「トンネルの話」の演題の下に講演を行つたのである。

#### 年次學術講演會

昭和十一年十月二十六日開催の本會常議員會に於ては東京其の他大學又は専門學校所在地を選び、年次學術講演會を開くこととして次の如き要綱を決議した。

一、東京其の他大學又は専門學校所在地を選び毎年四月土木學術講演會を開く。但日本工學會大會開催の年は本講演會を開催せざるものとす。

二、講演會は凡て日本工學會大會土木部會に準じ會員より論文の提出及其の講演を求むるものとす。

三、講演會の日數は二日間とし何れも午前中を講演、午後を視察見學とす。

四、毎年の開催地及開催期日は理事會に於て之を定め、毎年一月會誌上に豫告するものとす。

五、開催地の學校當局及在任會員に講演委員會の設置を求め講演會開催に關する事務を依囑す。

六、講演會開催に關し直接必要とする經費は本會に於て之を負擔す。

七、講演會には會長之に出席す會長事故あるときは副會長の内一名之に出席す。

#### 第一回年次學術講演會

第一回年次學術講演會を昭和十二年四月十日より二日間京都帝國大學講堂に於て開催し、土木學會關西支部長工學博士高西敬義氏の開會の辭並に會長工學博士大河戸宗治氏の講演ありて後ち、三會場に於て第一日は午前及午後、第二日は午前中九十三の多數に互る講演が盛大に行はれ參會者實に八百六十餘名を算した、講演會終了後引續きプログラムに依りA、B、Cの三班に分れ京都附近を、第三日は終日阪神方面の視察見學を行ひ參加者四百三十餘名に及び非常なる盛況を呈したのである。

#### 第二回年次學術講演會

第二回年次學術講演會を昭和十三年七月十六日より二日間札幌市北海道帝國大學講堂に於て開催し北海道支部長工學博士吉町太郎一氏の開會の辭並に辰馬會長の代理として出席せる總務部長工學博士

山崎匡輔氏の講演ありて後ち、三會場に於て第一日は午前及午後、第二日は午前中八十六の多數に互る講演が盛大に行はれ參會者實に六百餘名を算した、講演終了後引續きA、B、Cの三班に分れ札幌及小樽附近の視察見學を行ひ、第三日以後は參加希望者を三班に分ち、第一班は樺太方面、第二班は層雲峽、阿寒方面、第三班は室蘭方面を視察見學を行ひ參加者二百餘名に及び非常なる盛況を呈したのである。

### 創立二十周年記念大會

昭和九年十月二十六日より三日間に亙り本會創立二十周年記念大會を開催した。記念祝賀會當日には會長久保田敬一氏の挨拶あり、次で内閣總理大臣、内務大臣、文部大臣、鐵道大臣及日本工學會其の他の祝辭あり、來賓として鐵道大臣内田信也閣下外四二名、會員二六〇名の出席があり極めて盛大に行はれた。二十七、二十八の二日間は帝國鐵道協會大講堂に於て午前中各部門に依る三二の論文が發表され參會者八百餘名であつた。午後は前掲の各種工場及土木工事の見學を行ひ參加者六百餘名の多數に上り本會創始以來の盛會であつた。

因に記念祝賀會に先だち十月二十二日本會會議室に於て十年以上勤續の北村嘉太郎外五君に對し表彰狀の授與並に記念品の贈呈を行ひ、十月二十四日は會長久保田敬一氏が「國民生活より觀たる土木



「工學」と題する講演をラヂオに依り全國に放送したのである。

#### 創立二十五周年記念大會

昭和十四年十月十八日より三日間に亙り本會創立二十五周年記念大會を開催した。記念晚餐會當日は會長八田嘉明氏の挨拶ありて宴に移り來賓六三名、會員一六〇名の出席があり、且つ會長八田嘉明氏の「戦争と土木」と題する講演をラヂオに依り全國に放送すると共に宴會場にも之を中繼し靜聽したのである。十九、二十日の二日間は帝國鐵道協會大講堂に於て午前中各部門に依る二三の論文が發表され參會者五百餘名であつた。午後は前掲の各種工場及土木工事の見學を行ひ參加者四百餘名にて盛會であつた。

#### 7 支部の設置

從來關西地方は關東に次で會員比較的多數在住し早くより大阪に本會支部開設の要望盛んなりしたため、昭和二年十月三十一日の役員會の決議に依り大阪市に關西支部を設置し、爾來本部と聯携して斯界のため幾多の貢獻を爲し來りたるが昭和十二年四月十七日の常議員會に於ては時勢の進運に伴ふ本會事業の發展と會員の増加は全國各地に支部設置の緊急なることを認め、且つ會員多數の要望に依り昭和十二年六月には東北支部を仙臺市に、同十二年十月には北海道支部を札幌市に、同十三年五月に

は中部支部を名古屋市に、同十三年七月には西部支部を福岡市に、同十四年九月には朝鮮支部を京城府に設置して本會本來の目的達成のため邁進することにしたのである。而して各支部規定及支部役員氏名は次の通りである。

## 土木學會關西支部規定

第一條 大阪ニ支會ヲ置キ之レヲ關西支部ト稱ス

第二條 支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス

講演會、見學旅行、土木ニ關スル研究調査

前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルヲ要ス

第三條 支部長ハ本會常議員會ニ出席シ決議ニ加ハルコトヲ得

第四條 支部長ハ左ノ府縣在住ノ會員ノ互選ニヨリ會長之ヲ委囑ス

京都府、大阪府、兵庫縣、奈良縣、滋賀縣、和歌山縣、岡山縣

第五條 支部長ノ任期ハ一箇年トシ重任スルコトヲ得ス

第六條 支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部長之ヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス

商議員 若干名

幹事長 一名

幹事 若干名

第七條 支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調製シ會長ノ承認ヲ受クヘシ

第八條 支部長ハ毎年一月十日迄ニ於テ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノトス

第九條 支部長ハ支部役員ノ數任期其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

## 土木學會東北支部規定

第一條 仙臺ニ支會ヲ置キ之ヲ土木學會東北支部ト稱ス

第二條 支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス

講演會、見學旅行、土木ニ關スル研究調査

前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルヲ要ス

第三條 支部長ハ本會常議員會ニ出席シ決議ニ加ハルコトヲ得

第四條 支部長ハ左ノ縣在任ノ會員ノ互選ニ依リ會長之ヲ委囑ス

福島縣、宮城縣、岩手縣、青森縣、秋田縣、山形縣

第五條 支部長ノ任期ハ一箇年トス

第六條 支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部長之ヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス

商議員 若干名

幹事長 一名

幹事 若干名

- 第七條 支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調製シ會長ノ承認ヲ受クヘシ
- 第八條 支部長ハ毎年一月十日迄ニ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノトス
- 第九條 支部長ハ支部役員ノ數任期其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

## 土木學會北海道支部規定

- 第一條 札幌ニ支會ヲ置キ之ヲ土木學會北海道支部ト稱ス
- 第二條 土木學會北海道支部ハ北海道及樺太在住者ヲ以テ組織ス
- 第三條 支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス  
講演會、見學旅行、土木ニ關スル研究調査
- 前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルヲ要ス
- 第四條 支部長ハ本會常議員會ニ出席シ決議ニ加ハルコトヲ得
- 第五條 支部長ハ北海道樺太在住ノ會員ノ互選ニ依リ會長之ヲ委囑ス
- 第六條 支部長ノ任期ハ一箇年トス
- 第七條 支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部長之ヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス
- |       |       |
|-------|-------|
| 商 議 員 | 若 干 名 |
| 幹 事 長 | 一 名   |
| 幹 事   | 若 干 名 |
- 第八條 支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調製シ會長ノ承認ヲ受クヘシ

第九條 支部長ハ毎年一月十日迄ニ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノトス

第十條 支部長ハ支部役員ノ數任期其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

## 土木學會中部支部規定

第一條 名古屋市ニ支會ヲ置キ之ヲ土木學會中部支部ト稱ス

第二條 土木學會中部支部ハ左ノ各縣ニ在住スル土木學會々員ヲ以テ組織ス

靜岡縣、愛知縣、三重縣、岐阜縣、福井縣、石川縣、富山縣、長野縣

第三條 支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス

講演會、見學旅行、土木ニ關スル研究調査

前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルヲ要ス

第四條 支部長ハ本會常議員會ニ出席シ決議ニ加ハルコトヲ得

第五條 支部長ハ支部内在住ノ本會々員ノ互選ニヨリ會長之レヲ委囑ス

第六條 支部長ノ任期ハ一箇年トス

第七條 支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部長之レヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス

評議員 若干名

幹事長 一名

幹事 若干名

第八條 支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調製シ會長ノ承認ヲ受クヘシ

- 第九條 支部長ハ毎年一月十日迄ニ於テ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノトス
- 第十條 支部長ハ支部役員ノ數任期其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

## 土木學會西部支部規定

- 第一條 福岡ニ支會ヲ置キ之ヲ土木學會西部支部ト稱ス
- 第二條 支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス  
講演會、見學旅行、土木ニ關スル研究調査
- 前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルモノトス
- 第三條 支部長ハ本會常議員會ニ出席シ決議ニ加ハルコトヲ得
- 第四條 支部長ハ在ノ各縣在住ノ會員ノ互選ニヨリ會長之ヲ委囑ス  
山口縣、福岡縣、佐賀縣、長崎縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣、鹿児島縣、沖繩縣
- 第五條 支部長ノ任期ハ一箇年トス
- 第六條 支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部長之ヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス
- |     |     |
|-----|-----|
| 商議員 | 若干名 |
| 幹事長 | 一名  |
| 幹事  | 若干名 |
- 第七條 支部長ハ必要ニ應ジ支部ニ左ノ職員ヲ置クコトヲ得

主 事 一 名  
書 記 若 干 名

第八條 支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調査シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

第九條 支部長ハ毎年一月十日迄ニ於テ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノトス

第十條 支部長ハ支部役員ノ數任期其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

## 土木學會朝鮮支部規定

第一條 京城ニ支會ヲ置キ之ヲ土木學會朝鮮支部ト稱ス

第二條 土木學會朝鮮支部ハ朝鮮在住者ヲ以テ組織ス

第三條 支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス

講演會、見學旅行、土木ニ關スル研究調査

前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルヲ要ス

第四條 支部長ハ本會常議員會ニ出席シ決議ニ加ハルコトヲ得

第五條 支部長ハ朝鮮在住ノ會員ノ互選ニ依リ會長之ヲ委囑ス

第六條 支部長ノ任期ハ一箇年トス

第七條 支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部長之ヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス

評 議 員 若 干 名

幹事長 一名  
 幹事 若干名  
 第八條 支部長ハ必要ニ應ジ支部ニ左ノ職員ヲ置クコトヲ得

主事 一名  
 書記 若干名

第九條 支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調製シ會長ノ承認ヲ受クヘシ

第十條 支部長ハ毎年一月十日迄ニ於テ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノ

トス

第十一條 支部長ハ支部役員ノ數、任期、其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

關西支部役員

	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年
支部長	眞田秀古	直木倫太郎	坂本助太郎	島重治
商議員	後藤佐彦	川口愛太郎	荒木文四郎	岩田成實
"	坂出鳴海	田邊良忠	近藤博夫	高橋逸夫
"	直木倫太郎	瀧山與島	島重治	高橋三省
"	木村芳人	高西敬義	清水重治	安田靖一
"	上田寧	高田景	高橋逸夫	古川淳三



支部長	後藤佐彦	昭和七年
商議員	青木精一	
〃	岩田成實	
〃	內山新之助	
〃	上井兼吉	
支部長	岩田成實	昭和八年
商議員	上井兼吉	
〃	內山新之助	
〃	大木外次郎	
〃	岡部三郎	
支部長	松島寛三郎	昭和九年
商議員	大木外次郎	
〃	近藤泰夫	
〃	齋藤泰夫	
〃	島崎孝彦	
支部長	永井高三	昭和十年
商議員	近藤泰夫	
〃	佐藤泰夫	
〃	杉谷茂	
〃	田淵壽郎	

囑託	幹事	幹事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
上田令吉	鈴木義一	平瀬三雄	後藤佐彦	村山喜一郎	大井清一	瀧山與郎	森垣龜一郎	田邊良忠	阪本太郎	牛島航
上田令吉	鈴木義一	平瀬三雄	後藤佐彦	平野正雄	島重治	清水淵	木村芳人	坂本太郎	牛島航	永井專三
上田令吉	鈴木義一	平瀬三雄	後藤佐彦	三輪周藏	松島寛三郎	古川淳三	平野正雄	永井專三	調所光義	高西敬義
上田令吉	鈴木義一	平瀬三雄	近藤博夫	澁江武藏	三輪周藏	調所武光	青木精一	荒木四郎	後藤佐彦	近藤博夫

主事	幹事	幹事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	商議員
上田令吉	平瀨三雄	鈴木義一	近藤博夫	安田靖一	中村與一郎	武居高四郎	高橋省三	高橋誠一	澁江武	木村喬	岡部三郎
山本留次郎	高橋末次郎	鈴木義一	近藤博夫	三浦矩明	平瀨三雄	中村與一郎	武居高四郎	島崎孝彦	柴田進	齋藤飾	木村喬
山本留次郎	柴田辰之進	高橋末次郎	近藤博夫	與田喜藏	吉岡計之助	三浦矩明	福留並喜	平瀨三雄	富田惠四郎	杉谷茂	柴田辰之進
山本留次郎	柴田辰之進	高橋末次郎	島崎孝彦	吉岡計之助	與田喜藏	山內喜之助	福留並喜	原田類助	橋本敬三	中川幸太郎	富田惠四郎

〃	〃	商議員	支部長	
澤井八洲男	奧中喜一代	有光正	清水熙	昭和十一年
石井穎一郎	有光正	青山秀雄	高西敬義	昭和十二年
石原藤次郎	石井穎一郎	青山秀雄	島崎孝彦	昭和十三年
岩井芳通	泉谷平次郎	石原藤次郎	福留並喜	昭和十四年

主事	幹事	幹事	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
山本留次郎	柴田辰之進	鮫島午吉	島崎孝彥					松田健作	山內喜之助	原田類助	橋本敬三	糠澤惟助	中川幸太郎	坪井豐彦	田淵壽郎	佐藤壽鼎
山本留次郎	柴田辰之進	鮫島午吉	島崎孝彥					宮內義則	松田健作	糠澤惟助	長久保俊夫	澤井八洲男	筧斌治	奧中喜代一	荻原基治	岩崎雄治
山本留次郎	柴田辰之進	鮫島午吉	荻原基治		宮內義則	三好貞七	林千秋	西義一	鈴木義一	鈴木角一	荻原基治	筧斌治	岩崎雄治	岩井芳通	稻浦鹿藏	
山本留次郎	堀威夫	鮫島午吉	荻野基治	三好貞七	平野重市	林千秋	西義一	成瀬喬年	永田義正	田村義一郎	鈴木角一	鈴木義一	後藤宇太郎	川上留吉	荻野竹四郎	稻浦鹿藏

東北支部役員

商議員	支部長	
青木信夫	鶴見一之	昭和十二年
内田 稔		
大石 巖		
岡崎 信雄		
河合 清		
熊田 隆治		
小坂 忠一		
田淵 壽郎		
高田 廣		
中原 藤一		
青木信夫	鶴見一之	昭和十三年
内田 稔		
大石 巖		
岡崎 信雄		
河合 清		
金森 誠之		
金山 經亮		
上山 治郎		
小出 巖治		
小坂 忠一		
佐々木 銑		
佐藤 東次郎		
田淵 壽郎		
高田 廣		
中原 藤一		
飯島馨之助	鶴見一之	昭和十四年
内田 稔		
大石 巖		
岡崎 信雄		
河合 清		
金森 誠之		
金山 經亮		
上山 治郎		
小出 巖治		
小坂 忠一		
後藤 久吉		
後藤 季總		
佐々木 銑		
佐藤 東次郎		
薄田 清		

商 議 員	支 部 長	吉 町 太 郎 一	井 口 鹿 象	菅 良 二	菊 地 清	古 藤 猛 哉	齋 藤 靜 脩	神 保 金 衛	相 山 常 治	田 中 茂 美	奈 良 部 龜 松
		吉 町 太 郎 一	井 口 鹿 象	稻 積 豐 二	小 野 諒 兄	菅 良 二	神 保 金 衛	千 秋 邦 夫	調 所 武 光	奈 良 部 龜 松	宮 本 保
		神 保 金 衛	小 野 諒 兄	齋 藤 靜 脩	杉 森 文 彦	千 秋 邦 夫	鷹 部 屋 福 平	奈 良 部 龜 松	野 村 多 津 雄	平 尾 俊 雄	宮 本 保

北海道支部役員

主 事	幹 事	幹 事 長	三 島 卯 四 郎	藤 田 金 治 郎	中 島 忠 次	菊 田 政 吉
菊 田 政 吉	中 津 海 慎 二	中 島 忠 次	藤 田 金 治 郎	三 島 卯 四 郎	三 島 卯 四 郎	菊 田 政 吉
菊 田 政 吉	中 津 海 慎 二	中 島 忠 次	門 澤 利 三	三 島 卯 四 郎	三 島 卯 四 郎	菊 田 政 吉

商議員	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事
渡邊榮五郎	鷹部屋福平	小川讓二	林猛雄	酒井忠明	大坪喜久太郎	小川讓二	小川讓二	小川讓二	小川讓二	小川讓二	小川讓二
山岡信吾	鷹部屋福平	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝
山岡信吾	大坪喜久太郎	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝	安藝眞孝

中部支部役員

支部長	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員
杉山榮	北澤忠男	池田篤三郎	上井兼吉	奥田助七郎	大串榮太郎	大島六七男	金子久治	金子久治	金子久治	金子久治	金子久治
城石鎖吉	北澤忠男	鈴木鹿象	關谷新造	中田忠義	永田民也	永田民也	永田民也	永田民也	永田民也	永田民也	永田民也
北澤忠男	池田篤三郎	石川榮治郎	上井兼吉	大島六七男	大島六七男	大島六七男	大島六七男	大島六七男	大島六七男	大島六七男	大島六七男
奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎	奥田助七郎

商 議 員	支 部 長	昭 和 十 三 年
小 早 川 貞 三	君 島 八 郎	
志 道 鐵 造	佐 藤 忠 三 郎	
大 木 利 彦	伊 藤 百 八 郎	昭 和 十 四 年
佐 藤 長 太 郎	河 合 清	

西部支部役員

幹 事	幹 事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
塚 本 積	杉 戸 清	今 泉 佳 三 郎	塚 本 積	北 澤 忠 男	山 口 十 一 郎	柳 夕 瀨 正 哉	三 宅 發 造	平 川 保 一	昌 山 好 伸	花 井 又 太 郎
三 上	船 本 貫	比 企 野 廣 治								
杉 戸 清	大 西 英 式	今 泉 佳 三 郎	千 田 正 重	塚 本 積	永 田 民 也	中 村 滿 輔	中 原 壽 一 郎	中 島 忠 義	塚 本 積	田 淵 壽 郎
船 本 貫 時	比 企 野 廣 治					山 口 十 一 郎	三 宅 發 造	丸 山 悅 三	平 川 保 一	花 井 又 太 郎

商議員	關口秀一	三瀬幸三郎	志道鐵造	松尾守治
德弘春美	三原久隆	關口秀一	三瀬幸三郎	
土肥憲二	山田正隆	德弘春美	三原久隆	
德田文作		土肥憲二	三原久隆	
松尾守治		德田文作	三原久隆	
鮫島茂		安藏善之輔	細川英二郎	
幹事長	門澤利三	安藏善之輔	細川英二郎	
幹事		鮫島茂	長久保信夫	
幹事			山田正隆	
幹事			山田正隆	
幹事			山田正隆	
幹事			山田正隆	

朝鮮支部役員

昭和十四年

支部長	新田留次郎	久保田豐	武居軍次郎	待山義雄
評議員	池神重政	清水幸次	長郷衛二	横井増治
市村定	江崎義人	榛葉孝平	伏島信九郎	
川澤章明	山岡敬介	鈴木木坂鐵	本間孝義	
野上強四郎	山本佳六	橋本敏男		星治雄